

# 仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所  
 980 仙台市本町一丁目2番12号  
 電話〇二二二一七三七七番  
 編集・発行人 首藤 正義

## マスコミの現状

### それは、教会に対する一つの挑戦！

今年の第19回世界広報の日のテーマは、「マスコミと青年 若者のキリスト教的な成長」である。世界平和の日の教皇メッセージ「平和と青年はともに前進する」と国連の「国際青年年」に呼応するかたちで「青年」に関する事柄が広報の日にあたってとりあげられた。仙台教区として、これをどのように受けとめるのであろうか。司牧者・信徒、特に青年達はどのように受けとめているのだろうか。

#### 福音宣教の助けとしてマスコミを使用

教皇庁広報委員会の司牧指針「コミュニケーションと進歩」は、マスコミの引き起こす困難な問題を認めながらも、「それらに直面し、征服しなければならぬ」ことを強調する。そして、「若者が成熟したキリスト者・おとなになるための助けとしてマスコミを使用しなければならぬ」と主張している。

#### マスコミの送り手と受け手の現状

マスコミの現実を見ると、送り手は利益追

求、特定のイデオロギーに追従する人間を作りあげようとし、キリスト教的な理想とはほど遠いものになっている。そして受け手、特に若者たちは消費主義、世俗的自由主義、放任主義、非キリスト教的イデオロギー、現実からの逃避、利己主義、暴力、快樂主義などの危機に立たされている。

#### マスコミからの挑戦

このような危機的状况にあつて若者たちはマスコミに対する批判精神を失い、現実逃避、流行に身を委ね、大切な「成長」の時を浪費してしまっている。それは教会の司牧者・信徒にとつて大きな課題ともなっている。テレビ・ラジオ・印刷物等にひきつけられ、多くの時間を費やす若者を批判する教会は、同時にそれらのものから一つの挑戦を受けているのである。すなわち、若者をひきつけるものを提示しなければならぬという挑戦。

一週間30時間テレビの前にクギづけにされている若者を、教会はみことばの前にどれだ

けとどまらせることが出来るのだろうか。またその努力はいかほどしているのだろうか。

#### 理解できる言葉によるメッセージを

司牧者は現代のマスコミの挑戦に対して、何が出来るのだろうか。個人として、教会共同体として、やるべきことは何か。

マスコミをコントロールする人、プログラ

(次ページへつづく)

#### 司教様の日程

(5月7日現在)



- 5月8日 人権福祉委員会(東京)
- 9日 常任司教委員会(東京)
- 10日 社会福祉委員会(東京)
- 12日 オタワ愛徳修道女会誓願式(仙台)
- 13日 教区司祭団役員会(仙台)
- 16日 カリタス・ジャパン事務局(東京)
- 17、18日 男女修道会総長・管区長会(山中湖)
- 19日 西仙台教会聖信
- 20日 カトリック3校定期戦(仙台)
- 23日 カリタス・ジャパン事務局(東京)
- 24日 難民施設関係連絡会議(東京)
- 25日 社会福祉法人評議会(仙台)
- 26日 聖霊降臨祭(元寺小路教会)
- 27日 教区司祭団月例会(仙台)
- 28日 カトリック難民定住対策特別委員会(東京)
- 29日 社会福祉法人理事会、スペルマン病院理事会(仙台)
- 30日 会津ドミニカン修道院・院長選挙

仙台司教区司牧評議会

3月7日 於・元寺小路教会・信徒館

司牧評議会の定例会議(第16回)が去る3月17日に開かれた。主な議題は、(1)年頭司教書簡に定める教区の活動の推進。(2)カテドラティクム1%アップの件、の二つ。また、報告として司教総代理からカテドラル建設についての現在の動きおよび今後の見通しの説明があった。

(1)の件では、まず、明年9月の教区大会に向かう動きが扱われ、各教会の意識と話し合いの状況について各地区からの報告を交換。また、大会企画委の報告(4月1日号参照)に対する質疑・要望が交わされ、各教会宛に参加予定者数などの予備調査も行なわれること

< 若者の声 >

今、何を考えていますか。今、何かを求めていますか。ただ、何となく過ぎていく日々。これではいけないと考えます。一日を終えてみて、ああ疲れたと、身体だけが疲れることが多いのではないのでしょうか。もっと考えたいのでしょいか。もっと悩もう。毎日考えて、悩んだらいいと考えます。毎日、何かを発見し、驚いたり、喜んだり、悲しんだりしていますか。何年か過ぎて、何故あんな些細なことで悩んでいたんだらうと思ってもその時、真剣に考えていたならきつと自分自身の為になつたんだと考え

とになった。次に、青少年の健全育成のための活動推進について話し合われ、家庭や教会

での青少年の役割をもっと大きくすること、幼児教育からの見直し、小教区を超えた仲間作り、性教育の重要性など取り上げられた。

(2)の件は、意見が1%アップは止むを得ないとするものと根拠不十分というものとに分かれたので継続審議となつたが、次回までに健全な教区会計のための資料を揃えてもらい、アップを決定した時点で4月に遡って納入してもよい、ということに落ち着いた。

浪打教会にレイモンド・デロシェ師

師は、インドネシアでの数年間の宣教活動を終えて、昨年再び日本に帰られ、この4月に浪打教会助任として着任された。

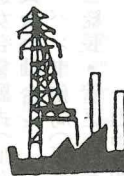
ます。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」「自分を愛するようになあなたの隣り人を愛せよ」これから私たち青年は、様々な場所で、様々な人たちに必要とされるでしょう。そして私たちは、それに答えていかなければなら



ないでしょう。そしてまた、私たちは様々なことを働きかけていくでしょう。その為には、今のままでいけないと考えます。視野を広げ、何事にも真剣な態度で臨んでいかなければならないと考えます。(君島 香織)

(前ページよりつづく)

ムを作る人などのようなコンタクトを持つてゐるか。若者を理解し、彼らの考え方や直面している問題を知っているだろうか。知ろうとしているだろうか。若者の手助けのためのお金と時間と場所の用意があるのだろうか。若者のキリスト教的な成長を助けるために、福音によつて彼らの心に近づき、ふさわしい人材と方法を用いて、若者の立場で彼らと出会い、彼らの理解できる言葉でメッセージを伝えなければならぬ。



お知らせ

\*講演会

日時 6月1日 午後6時30分  
ところ 元寺小路教会

テーマ 「国際青年年を考える」

講師 岡 宏神父(浦和教区司祭)

主催 仙台教区広報委員会

\*後藤寿庵大祈願祭

日時 6月2日 午前9時30分

場所 水沢市福原地内字西田 寿庵廟前

内容 ※雨天の場合 福原担い手センター 式典・親睦会

ミサの中で教皇大使の講話あり

\*聖書講座

5月から7月まで4回、雨宮神父(東京教区)を招いて仙台で行なわれる。

費用 一般七百元、学生五百円。

詳細は元寺小路教会へ。

ブラジルを訪ねて(4)

東仙台 長井 和子

7月の冬の日がかたむきかける頃、マルゴット神父様と大勢の子供たちに迎えられて、アモレイラに着きました。ほとんど同じ位にベルギーから妹夫妻、姫路から弟神父様が着かれ、カーザ・パロキアは一段とにぎやかさを増しました。親に捨てられた子、親を失った子、親を知らない子供、まだ短い人生の間に傷ついてこの家に迎え入れられた子供達30人程が、神父様の家族として生活しています。

ガタピシの家はベッドもなければお金もない。一平方メートルも自分の自由になる場がない。子供たちの寝ている空間を見つけて体を横にするというのがこの家の状況です。あるもの、それは大きな借金と子供たちの元気な声、安らぎと祈りです。みなこの家の最上の宝です。子供たちはこの家に来て初めて、神父様の暖かい愛にふれ、傷ついた心がだんだんといやされ、喜びを知るようになりました。そして、今自分が出る方法で人の喜びになろうとしています。

ミサの最中、息せききつて一人の子供がかけて来て来ました。「バードレ、おじいさんが道で死にそう」。そして又飛び出しました。私も子供のあとを追って走りました。老人はすでに息を引き取っていました。「まあーかわいそうに」その小さい手で静かに目を閉じ、そこから花をつんできて胸にのせました。

一人ポッチの寂しさ悲しみを充分知っているから、誰にも見とられずに死んで行った老人が哀れで、子供は通りすぎるのが出来なかつたのです。その夜、老人はこの家で一番立派な机の上でたくさんの子供に囲まれ、祈りのうちに夜を明かし、翌朝早くねんごろに葬られました。北から南から、土地を追われた人々がアモレイラは安住の地と聞いてやってきます。老人もその一人だったので。

日曜日、村人は手に手に紙袋や花を持ってミサに集まってきました。奉献の時祭壇に捧げます。バードレは言います。「何も無い人も自分自身を捧げなさい」。自分よりも困っている人と分かち合うのです。彼らは人が飢えに苦しむのがたえられないのです。サイフを全部はたいて献金します。中身をあさつて指でつまみ出して袋に入れるのと違うのです。

「やもめのさいせん」(マルコ12・41/44) 貧しいから100%実践出来るのです。一杯のスプシかないものを、「どうぞ」と旅人の私に差し出します。一口ずつ飲んで神に感謝出来るのです。奉献された米や豆は一番困っている人から順に分けられます。バードレは言われます。「貧しいけれど貧しさに負けない村」と。「貧しいあなたがたは幸い」(ルカ6・20)

貧しい人のなかで最も貧しくなられたイエズス様は、今も貧しい人の中で生きておられます。この人達の中にどっさり座って、みことばをみつめ、聞き、みことばが語られる時、そこにはいつも神の愛といつくしみのドラマが大きく展開されるのを見ることが出来るのです。



高血圧症で入院した。種々の病いの方々が入院しており、年齢も職業も多様で、それ故、各人の苦悩も多様のように見受けられた。それに応じて、日夜、

看護するお医者さんや看護婦さんたちの苦勞も多様で、非常に御苦勞のことと察せられた。

今まで、病人の苦しみ、看護する人々の苦勞を、頭では理解していたつもりだったが、それは、あくまでも、頭だけで分かっていただけで、本当のところは、何も分かってはいないことを知った。

「人間とは、体験の動物である」と言われる。自分で体験して来たことがらだけが、知識となり、判断の基礎とも規準ともなる。

今回、入院を体験したことで、病人の苦しみを少しは、判断できるようになつたかもしれない。けれども、それは、あくまでも「自分の病気の体験」であつて他の方々の多様な苦しみをでも判断することはできないのだと、いうことも知らされた。

私たちは、おそらく、どんな才能に恵まれていたとしても、自分の判断を他者を裁く規準にしてはいけなのだと、心するのみ。

(TNT)

# おらが教会

(52)

青森・鮫教会



## 創立当時

鮫教会は昭和27年、八戸市に塩町教会に次いで創設された教会である。初代主任司祭はジョリコル神父様である。ケベック宣教会では、昭和27年、鮫町大開2番地坂本福一郎氏所有の土地328坪を購入、さらに地続きの宮崎与志氏所有の土地175坪を購入して、ここに先ず幼稚園をつくり、園舎の一室を仮教会としてミサ・集会を行い、求道者の指導にあたった。創立当時の鮫教会の信徒は川口一家、楡木一家、横山一家、佐々木弘子さん他、若干名の幼稚園の先生であった。教会が開設された年の11月一人、12月9人の受洗者があった。

## 現在の信徒数

約30世帯100人である。常時ミサに出席するのは30人位である。

## 教会の地理的位置

「唄に夜明けたかもめの港」と歌われる鮫の港と、数万羽のウミネコで名高い蕉(カブ)島も徒歩で20分位の所にある。隣接して、昨年11月に30周年を迎えた新装なったフアチマ幼稚園があり、目の先に鮫小学校がある。

## 教会内の種々の活動

先ず、各教会に知られているのに司教館草取り作業がある。往復路には聖地を巡礼し、信徒の思いを新たにし、各教会を訪問、親睦を深めた。また、特色として当教会にパイオルガンが設置されており、毎日曜日のごミサには他の教会に聞かれない伴奏で聖歌を合唱している。年2回位、弘前大学院講師成田恵子先生のパイオルガン演奏会が盛大に開かれる。

家族的な教会、と言われる理由に、大祝日後のパーティーがある。ご復活祭には婦人会の若手の方々の手作り料理、主に洋風のもの。聖母被昇天祭には男性が担当し、野外パーティーで野戦料理、イワシの塩焼、イカのポコポコ焼、すいかのブッタ切り、子供には花火大会、ひょうきんな盆踊りも飛び出したりする。クリスマスには婦人会の老年部担当の郷土料理で楽しく過す。工業港も控えているので、クリスマスにフィリピン船員が来客として加わり、国際的な聖夜のパーティーを過したこともある。また、バザー、廃品回収も小規模ながら行っている。

塩町教会との合同行事として、聖週間、マリア祭、ロザリオ会、男女黙想会、野外ミサ、夏期学校、墓地清掃など、協力的に行われている。また、日曜日のごミサの締めくくりとして、鮫教会にゆかりの神父様で、フィリピンでご活躍中の石川隆三郎神父様のため、祈りを捧げている。

## 主任神父様の横顔

渡辺昭一神父様



昭和8年北海道岩内に生れる。東京カトリック神学院に入学、昭和42年7月8日、小林有方司教により司祭叙階、築館教会を経て昭和52年から鮫教会主任司祭となる。

神父様は、特技と申しますか、趣味として囲碁があり、3段の腕前と伺っている。大会に度々出席、賞状、トロフィーを必ず持ち帰る実践型、勝負強さは天下一品である。普段口数が少ないようだが実践力は抜群で、ここ四、五年のうちに司祭館、信徒館、幼稚園を落成させた早技には信徒が舌を巻いている。囲碁から来る攻めの理づめ、勘所をよくわかまえた所業と信じている。

(信徒会長・川口徳治)

昭和60年度宮城県カトリック教会信徒大会  
主題：教区大会テーマ

「明日の教会を目指してー教会の未来は家庭にかかっているー」

日時：7月7日(日)午前10時～午後3時30分  
会場：仙台白百合学園講堂ほか

【編集後記】人が人として成長し、成熟するために三つの要素が大切であるといわれる。心の成長・知的成長・身体的成長。この三つの、バランスが特に重要である。省みるに今の日本、特に子供の教育において、バランスがとれていると言えるだろうか。「いじめ」等の問題は「心の成長」を等閑にしていた結果ともいえる。また、子供のいじめは第三世界に対する日本の「いじめ」の写しでもある。今こそ教会が声を出す時。

(首)